

動詞的動名詞の歴史的発達について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大村, 光弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00001101

動詞的動名詞の歴史的発達について*

大 村 光 弘

0. はじめに

本稿の目的は、英語史において特異な発達を遂げてきた動詞的動名詞について、その発達過程を記述すると共に、生成文法に基づく説明を与えることである。中心的主張は、以下に示したとおりである。

- (1) 動名詞は、英語の歴史のなかで、IP の表わす事態 (state of affairs) を指示できるようになった。この変化は、機能範疇 D が NP 補部だけでなく、IP 補部もしたがえるようになったことを意味している。

1 節では、ヘルシンキコーパスに基づく調査から、動詞的動名詞の歴史的発達を記述する。2 節では、生成文法の見地から動詞的動名詞の発達に説明を与える。3 節では、動詞的動名詞の主語について考察を試みる。

1. 動詞的動名詞の発達

1.1. 動名詞のもつ文的特徴

古英語期の -ung/-ing 接辞は、動詞から女性名詞を派生する派生接辞 (derivational affix) であり、この接辞が付いた動名詞は純然たる名詞であった。中英語期に入ると、-ung 形態は消失し、-ing 形態は一般化の傾向を強める。さらに、中英語期から近代英語期にかけて、動名詞の中に文の持つ様々な特徴を持つものが現われるようになる。なぜ動名詞が文の持つ特徴を獲得するに至ったのかについては後の節で述べることにして、1 節では、動名詞が文の持つ特徴を獲得していった歴史的過程を詳しく記述する。以下に示す表 1 から表 6 は、

(a)副詞と共起する、(b)前置詞 of を介することなく目的語名詞句をとる、(c)叙述構造 (be+述語) をなす、(d)否定辞 not をともなう、(e)受動形をなす、(f)完了形をなすといった6項目について、ヘルシンキコーパスに基づく独自の調査結果をまとめたものである¹。

表1 副詞と共起する動名詞

年代区分	1000語当たりの発生率
1250-1350	0.03
1350-1420	0.05
1420-1500	0.08
1500-1570	0.18
1570-1640	0.27
1640-1710	0.45

表2 目的語名詞句を直接しがえる動名詞

年代区分	1000語当たりの発生率
1250-1350	0.01
1350-1420	0.03
1420-1500	0.18
1500-1570	0.37
1570-1640	0.85
1640-1710	2.19

表3 叙述構造をなす動名詞

年代区分	1000語当たりの発生率
1420-1500	0.005
1500-1570	0.026
1570-1640	0.095
1640-1710	0.199

表4 否定辞 not をともなう動名詞

年代区分	1000語当たりの発生率
1570-1640	0.016
1640-1710	0.076

表5 受動態動名詞

年代区分	1000語当たりの発生率
1570-1640	0.026
1640-1710	0.170

表6 完了形動名詞

年代区分	1000語当たりの発生率
1570-1640	0.01
1640-1710	0.07

これらの調査結果が示す事柄をまとめてみよう。動名詞は、中英語期のかなり早い時期から副詞と共起したり、目的語名詞句を直接しがえるようになる。また、表中の発生率の上昇具合から分かるように、これらの動詞の特徴をもつ動名詞は、16世紀頃から急速に発達していく²。この時期を境に動名詞の動詞的性格が著しく高まったことは、(3)に示したように、二重目的語をとる動詞が動名詞として用いられている例や、(4)に示したように、不変化詞移動 (particle movement) に関わる動名詞の例が、17世紀に入ってから現われ始めることか

らも明らかである。

(3) a . 17 c, *Letters Harley*, 2

I thanke you for sending me word
'I thank you for sending me word'

b . 17 c, *Merry Wives*, 44. C 1

from giuing him cause
'from giving him cause'

(4) a . 17 c, *Plain and Full Instructions*, 129

without cutting them off

b . 17 c, *Burnet's History of My Own Time*, Part 1, I, 173

He had such an extravagant vanity in setting himself out, that it
was very disagreeable.

つぎに、表3から表6の調査結果に目を向けてみよう。叙述構造をなす動名詞は中英語期から生起し始めるが、中英語期ではまだ稀で、近代英語期に入ってから徐々に発達している。否定辞 not を伴う動名詞や、完了形や受動形の形式をとる動名詞は、中英語期には見られず、16世紀後半から生起し始める³。とりわけ、完了形や受動形をとる動名詞の出現は、この頃から文に似た内部構造をもつ動名詞が出現するようになったことを意味している。

1.2. 動詞の特徴を持つ動名詞の発生要因

1.2節では、おもに Visser の観察に基づいて、動詞の特徴を持つ動名詞の出現要因を考察する。はじめに、現在分詞と動名詞の間の音韻的・形態的交差をとりあげてみよう。中英語期に、南部地方・中部地方で一般的に用いられていた現在分詞語尾 inde (/ində/) は、形態素末の /ə/ が消失したことに加えて、しばしば /d/ が発音されないことがあり、/in/ と発音されていた。一方で、動名詞語尾であった -ing の形態素末の /ŋ/ は発音されない傾向にあり、結果として、現在分詞の場合同様に /in/ と発音されていた。発音におけるこの類似性は、(5) に示した脚韻の例から知ることができる⁴。

- (5) a . 1375, *Scottish Legends*, 6, 85
 bynd 'bind' ----- kinge 'king' / thrynge 'pressing'
 b . 1400, *Life St. Alexius*, 63
 tydingge 'tidings'----- liggynde 'lying'
 c . *idem.*, 145
 sekynd 'seeking' ----- tyding 'tidings'

さらに、(6)から(8)に挙げた同一語に関する異綴りからも、動名詞語尾と現在分詞語尾が音声的に類似していたことがわかる⁵。

- (6) a . 1250, *zene Latemeste Dai*, 99
 furberninge 'burning up'
 b . *idem.*, 108
 furberninde

- (7) a . 1349, *The Commandment*, 95
 owtkastyng 'throwing out'
 b . *idem.*, 120
 castand owt

- (8) a . 1425, *Chauliac's Grande Chirurgie*, 9
 Drieng 'drying'
 b . *idem.*, 45
 driand

このような音韻的・形態的交差によって、現在分詞はもともとの形態（すなわち、-inde）を失ないつつ、動名詞から-ing 形態をもらうことになる。中尾（1972：164）によれば、この変化は15世紀頃までに完了する。

つぎに、動名詞と不定詞との間の音韻的・形態的交差に目を向けてみよう。古英語期に与格不定詞 (dative infinitive) 語尾であった-enne は、中英語期に形態素末の/e/およびその前の/n/が消失し、結果として、/in/と発音されるようになる。既にふれたように、動名詞も同様に/in/と発音されていたので、ここでも動名詞との間に音声的類似性が生じていたことになる。実際のところ、(9)から(12)

の例が示すように、この不定詞語尾は ing 語尾に置換されることがあった⁶。

(9) 1250, *Lay Brut B*, 16042

zan 3inge zat me beo3 to comende

the things which to me are to come

'the things which will happen to me' (cf. 1205, *Lay Brut A*, to cumen)

(10) 1382, *Wyclif*, tr. Exod., Luke, 7, 2

he was to dyingehe

he was to die

'he was dying'

(11) 1400, *Tale of Berin*, 347

This nyðte zat is to comyng

this night that is to come

'this night that is coming'

(12) 1470-1485, *M. d'A.*, I, iii, v; 38

He will put his owne child to nourisshynge to another woman

he will put his own child to nourish to another woman

'he will leave his own child to nourish to another woman'

尚、与格不定詞語尾-enne は 1500 年頃までに消失し、代わって to+原型不定詞の形式が確立する（中尾（1972：260）参照）。

以上、英語の歴史のなかで動名詞と現在分詞または不定詞の間に、形態的・音韻的交差が存在したことが示された。ここで、次のような結論が導かれる。

（純然たる名詞であった）動名詞と、現在分詞や与格不定詞といった動詞範疇の間に形態的・音韻的交差が生じた結果、前節で観察したような統語的特徴（たとえば、副詞との共起や前置詞 of 無しで目的語名詞句をとるなど）をもつ動名詞が現われるようになった。このことは、当時の英語話者が現在分詞や与格不定詞からの類推によって、（純然たる名詞であった）動名詞を動詞的に解釈するようになったことを意味している。次節では、生成文法の見地から、1.1 節で観察した史実に説明を与える。

2. 分析

2.1. 名詞句の構造

はじめに、動詞的動名詞の歴史的発達を説明するうえで用いる基本的仮定を明らかにしておく。第1に、名詞句の一般的構造は、(13)に示した DP 構造であると仮定する。

(13) 名詞句の基本構造⁷: [DP ...D [NP ... N ...]]

(13)において、NP はその指示物 (referent) の特性を表わし、機能範疇 D はこの指示物を実世界を含めた何らかの可能世界に写像する機能を果たす。また、現代英語の場合、NP の指示物が何らかの可能世界に存在する方法(たとえば、定性 (definiteness)、数量化 (quantification) など) が、D として語彙的に顕在化する場合がある。例えば、(14)における NP は、その指示物である犬というものが持つ一般的特性を表わす。また、素性 [+definite] を内在的に含む定冠詞は、この犬が何らかの可能世界に存在する特定の犬でありうる資格を与える。一方、素性 [-definite] を内在的に含む不定冠詞は、このような指示効果を持たない。結果として、NP の指示物は、何らかの可能世界に存在するある 1 匹の犬であるかまたは、犬という固体概念そのものとなる。

(14) a. [DP [D the (+definite)] [NP dog]]

b. [DP [D a (-definite)] [NP dog]]

名詞句の定性が決定詞の内在的素性によって決まらない場合もある。例えば、(15)において、名詞句全体の定性は、所有格名詞句と機能範疇 D との指定辞主要部関係 (Spec-head relation) によって決定されている。

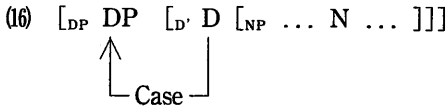
(15) a. [DP [DP John] [D' [D 's (+definite)] [NP dog]]]

b. [DP [DP someone] [D' [D 's (-definite)] [NP dog]]]

つまり、定名詞句 John を DP 指定辞に持つ (15 a) に対しては、John という人物が飼っている特定の犬を指示する解釈が与えられる。一方、不定名詞句 some-

one を DP 指定辞に持つ (15 b) に対しては、誰かが飼っている不特定の犬を指示する解釈が与えられる。

名詞句構造に関わる第 2 の仮定は、機能範疇 D が格を付与できるというものである。とりわけ、機能範疇 D は、指定辞主要部関係によって名詞句に構造的属格 (structural genitive Case) を付与する (大村 (1995) 参照)。



2.2. IP を選択する D

1.2 節で示唆したように、動名詞と現在分詞および動名詞と不定詞との間の音韻的・形態的交差の結果、動名詞の名詞主要部が動詞的である (そして更には、動詞である) と感じられることがあったと考えるのは信憑性に欠けるものではない。ここで、これまでの議論を整理する目的で、現在分詞や与格不定詞といった動詞的範疇と動名詞との音韻的・形態的交差と、動名詞が獲得した動詞の特徴との関係をまとめてみよう。1.1 節で観察した動名詞の統語的特徴は、時期的に次のように大きく三分化できる。

- (17) a. 初期中英語期に、動名詞と現在分詞及び動名詞と不定詞との間に音韻的・形態的交差が生じ始め、動名詞が動詞的に感じられるようになる。この結果、副詞に修飾される動名詞や前置詞無しに目的語名詞句をしたがえる動名詞などが出現する。
- b. 後期中英語期に、叙述構造をとる動名詞が出現する。
- c. 後期中英語期から初期近代英語期にかけて、副詞に修飾される動名詞や前置詞無しに目的語名詞句をとる動名詞の発生率が著しく上昇する。同時期に、受動態動名詞、否定辞 not を含む動名詞、完了形動名詞などが現われ始める。

節の基本構造(18)を踏まえたうえで、(17)を再考してみよう。

(18) 節の基本構造: $[_{IP} Infl \ [_{NegP} Neg \ [_{VP} V \dots]]]^8$

叙述形式をなす動名詞が出現する段階において、動名詞は出来事 (event) だけでなく be+述語形式が表わす状態 (state) も表わすようになる。叙述形式をなす動名詞の出現に伴って、形式上類似している受動態動名詞が出現する。ここまでの統語的特徴は、VP 内に限られている。これに対して、否定辞 not を含む動名詞や完了形動名詞の出現は、VP の外側に現われる機能範疇と密接に結びついている要素が、動名詞の中にも現われるようになったことを示している (完了相と Infl の関係については、Ohmura (1997) 参照)。このことは、「動詞的に解釈される」段階から「文的に解釈される」段階に進んだ動名詞が、出現するようになったこと (言い換えれば、(19 b) の構造を持つ動詞的動名詞が出現するようになったこと) を意味している^{9,10}。

(19) a. 15 世紀から 16 世紀頃に、機能範疇 D は NP 補部だけでなく、UG によって構築される一般の節構造 (すなわち、IP 補部) も選択できるように再解釈され始めた。

b. 動詞的動名詞の基本構造：

[_{DP} D [_{IP} [_I -ing] [_{NegP} Neg [_{VP} V ...]]]]

2.1 節で述べたように、機能範疇 D は、補部の指示物を実世界を含めた何らかの可能世界に写像する機能を果たす。実際、(20) の動詞的動名詞 (内部構造(21)) において、機能範疇 D は、IP 補部の表わす事態を現実世界に写像している。

(20) *Pro. and Ep. of W.*, Caxton, 91

I erryd in hurtyng and dyffamyng his book in dyuerce places

I erred in hurting and defaming his book in diverse places

'I erred in hurting and defaming his book in diverse places'

(21) [_{DP} D [_{IP} PRO Infl [_{VP} hurtyng and dyffamyng his book in dyuerce palces]]]

非定形 IP が現実世界の事態を指示できない (Ohmura (1997)) ことを考えると、(20) において動詞的動名詞の表わす事態を現実世界に位置づけているのは、機能範疇 D であると推論される。

2.3. 動詞的動名詞の分布

動詞的動名詞が(19b)の構造をなすとすると、動詞的動名詞が動詞的特性と名詞的特性を合わせ持つことが説明される。つまり、動詞的動名詞は、(19b)の内部構造を持つことから1.1節で観察した節的統語特性をもつとともに、全体の範疇がDPであることから名詞句の分布を示す。(22)から(27)に示した現代英語の事実は、この仮定を支持している。

第1に、節と異なり、動詞的動名詞は前置詞の目的語になる。

- (22) a. I learned about John's smoking stogies.
- b. I learned about John smoking stogies.
- c. I learned about John's weakness for stogies.
- d. *I learned about that John smoke(s) stogies.
- e. *I learned about (for John) to smoke stogies.

第2に、節と異なり、動詞的動名詞は主語助動詞倒置 (Subject-Auxiliary Inversion) を引き起こす。

- (23) a. Would John's smoking stogies bother you?
- b. ?Would John smoking stogies bother you?
- c. Does John's weakness for stogies bother you?
- d. *Does that John smokes stogies bother you?
- e. *Would (for John) to smoke stogies bother you?

第3に、節と異なり、動詞的動名詞は埋め込み節の主語になる。

- (24) a. I believe that John's smoking stogies would bother you.
- b. ?I believe that John smoking stogies would bother you.
- c. I believe that John's weakness for stogies bothers you.
- d. *I believe that that John smokes stogies bothers you.
- e. *I believe that (for John) to smoke stogies would bother you.

第4に、節と異なり、動詞的動名詞は文の先頭にある副詞に後続する。

- (25) a. Perhaps John's smoking stogies would bother you.
 b. Perhaps John smoking stogies would bother you.
 c. Perhaps John's weakness for stogies bothers you.
 d. ??Perhaps that John smokes stogies bothers you.
 e. ??Perhaps (for you) to smoke stogies would bother you.

第5に、節と異なり、動詞的動名詞は話題化 (topicalization) を受ける。

- (26) a. John's smoking stogies I can't abide.
 b. ?John smoking stogies I can't abide.
 c. John's weakness for stogies I can't abide.
 d. *That John smokes stogies I can't abide.
 e. *For John to smoke stogies I won't permit.

最後に、節と異なり、動詞的動名詞は分裂文の焦点 (focus) の位置に生起する。

- (27) a. It's John's smoking stogies that I can't abide.
 b. It's John smoking stogies that I can't abide.
 c. It's John's weakness for stogies that I can't abide.
 d. *It's that John smokes stogies that I can't believe.
 e. *It's for John to smoke stogies that I won't permit.

(All the examples in (22)-(27) are taken from Abney 1987: Chapter 3)

3. 動詞的動名詞の主語

現代英語において、動詞的動名詞の主語は属格 (genitive Case) で標示されるか、または、対格 (accusative Case) で標示される。3節では、動詞的動名詞の属格主語および対格主語について、歴史的考察を試みる。また、これら2種類の主語がどのように認可されるかを論じる。

3.1. 属格主語

大村 (1995) は、英語の歴史の中で名詞句内の属格付与は、概ね(28)に示した

変化を経たと主張している。

- (28) a. 古英語期において、N 主要部は内在的属格付与子 (inherent genitive Case assigner) であった。また、機能範疇 D は格付与に関して不活性であった。
- b. 中英語期において、N 主要部による内在的属格付与と D 主要部による構造的属格付与 (structural genitive Case assignment) の両方が存在していた。
- c. 近代英語期において、N 主要部による内在的属格付与は消失した。

この主張はとりわけ、後期中英語期以降生起するようになった動詞的動名詞における属格付与に対して重要な意味をもつ。たとえば、古英語期以来属格付与子であった N 主要部を欠く動詞的動名詞において、主語に属格を付与しているのは機能範疇 D であると推論できるからである。例えば、(29)における属格付与は、(30)として表わされる。

- (29) ?1400, *Dest. Troy*, 13766 — Tajima (1985: 82)
- his prokuryng prestly all the pure Troiens
- his procuring quickly all the pure Trojans
- 'his procuring all the pure Trojans quickly'

- (30) [_{DP} his [_{D'} D [_{IP} Infl [_{VP} t prokuryng prestly all the pure Troiens]]]]
- ↑ |
- Case -

古英語期より、名詞の主語は一般に属格で標示されていた。この意味で、動詞的動名詞における属格主語は、中英語期に現われた新しい形式ではない。このことから、動詞的動名詞が属格主語を伴うようになったのは、古英語期から存在していた一般的形式を、類推によって動詞的動名詞に拡張した結果だと思われる。

ヘルシンキコーパスを用いて、自動詞を基体 (root) にもち且つ副詞と共起している動名詞や目的語名詞句を直接したがえている動名詞が、属格主語を伴う例の数を調べてみると表 7 に示した結果が得られた。

表7 属格主語

年代区分	1000語当たりの発生率
1350-1420	0.027
1420-1500	0.061
1500-1570	0.089
1570-1640	0.142
1640-1710	0.421

たことを意味する。さらに、動詞的動名詞が拡張するにしたがって、主語名詞句が属格で標示される形式も拡張していったことが推測されるが、実際のところ表7の調査結果は、16世紀頃から属格主語を伴う(動詞的)動名詞の数が非常に増加していることを示している¹¹。

3.2. 対格主語

つぎに、動詞的動名詞の対格主語に目を向けてみよう。Visser (1966) や Tajima (1985) の調査が示すように、いわゆる通格 (common case) で標示される名詞句が動名詞の主語になっている例は、13世紀初めから現われ始める。

表8 通格主語

Periods	Non-pronominal	Pronominal
1200-1250	2	0
1250-1300	4	0
1300-1350	9	0
1350-1400	14	1
1400-1450	21	3
1450-1500	8	5

Tajima (1985: 122)

ここで注意しないのは、(31)のように、動名詞の主語がいわゆる通格で標示されていたとしても、すぐさまこの主語に抽象格 (abstract Case) としての対格が付与さ

れていたと即断できないことである。

(31) 1225, *King Horn*, 847 — Visser (1966: 1176)

At 3e sonne rysyng

at the sun rising

'at the time of the sun's rising'

何故なら、中英語期に抽象格としての属格を付与されていた名詞句が、顕在的な属格語尾を伴っていなかった可能性があるからである。これは、中英語期の名詞が屈折の水平化によって、古英語期には豊かであった屈折語尾を失う過程にあったからである。実際、古英語期の *sunne* 'sun' の属格単数形は *sunnan* であったが、(31)で属格を付与されている中英語期の *sonne* 'sun' は無屈折である。さらに、表 8 が示すように、動名詞の対格主語は、普通名詞と代名詞とでは生起し始めた時期にかなりの差がある。代名詞は、普通名詞とは異なり、付与されている抽象格の種類に関して形態的曖昧性がないので、動名詞の主語に対格が付与され始めた時期は、対格代名詞主語が生起し始めた 15 世紀頃であると考えるのが妥当であると思われる。

動詞的動名詞に属格主語が現われるようになったのは、名詞句一般について見られる形式（つまり、主語を属格で標示すること）を動詞的動名詞に適用した結果であると提案したが、対格主語の出現に関わる主要要因は如何なるものであろう。本稿では、動詞的動名詞が対格主語を伴うようになった主要要因は、現在分詞からの類推にあったと提案する。以下、このことを支持すると思われる幾つかの証拠を提示する。第 1 に、名詞を後置修飾する現在分詞の例から始めよう。この形式は、古英語期から見られる。

- (32) *O.E.Hom.* ii, 47 — Visser (1966: 1071)
 candele berninde
 torches burning
 'burning torches'

(32)において、現在分詞の意味上の主語は、この現在分詞が修飾している主要部名詞と解釈上同一である。動名詞と現在分詞が音韻的・形態的に交差していたこと（1.2 節参照）を考慮すると、後者からの類推や両者間の混同が引き金となって、対格主語を伴う動詞的動名詞が出現したと考えることが可能である¹²。第 2 に、(33)と(34)に挙げた独立分詞も、対格主語を伴う動名詞の出現に貢献したと考えられる。

- (33) *CM C*, 12525 — 中尾 (1972: 326)
 And iesus still him efter stal, Ioseph and mari vnwittand
 and Jesus still him after stole Ioseph and Mary unwitting

'and Jesus still stole after him, without Joseph and Mary noticing that'

(34) *PL I*, 32 — 中尾 (1972 : 326)

without th'advise of my lord of Bedford, him being in England,
without the advice of my lord of Bedford him being in England
and him being out, of my Lord of Gloucestre
and him being out of my Lord of Gloucestre
'without the advice of my lord of Bedford, who is in England and out,
and of my Lord of Gloucestre'

(33)と(34)では、独立分詞の主語が対格で標示されている¹³。第3に、近代英語期から非常に頻繁に現われるようになった(35)から(37)のような構文も注目に値する。

(35) 1549, *Sermon on the Ploughers*, 29

I thynke I se you lysting and hearkening
I think I see you listening and harkening
'I think I see you listening and harkening'

(36) 1611, *The New Testament*, John, Chapter 1, 38

Jesus turned, and saw them following
'Jesus turned, and saw them following'

(37) 1680, *Some Passages*, 157

once they heard him praying very devoutly
'once they heard him praying very devoutly'

現在分詞が母型動詞の目的語を意味上の主語に持つこのような形式が、同様の意味関係を含む対格主語付き動名詞の発達に影響を与えたという事は十分考えられることである。

つぎに、動詞的動名詞の主語に対格が付与される仕組みについて考察してみよう。本稿の提案は、(38 b)に示したとおりである。

(38) a . 1400, *Ld. Troy*, 6317 — Tajima (1985 : 126-127)

he was war of hem comyng
 he was cautious of him coming
 'he was cautious of him coming'

b . [_{DP} [hem] [_{D'} D [_{IP} Infl [_{VP} t [_{V'} coming]]]]]

↑
 └ Case ─┘

(38 b)において、機能範疇 D が主語代名詞に対格を付与している¹⁴。この格付与の仕組みは英語の動名詞が現在分詞からの影響を強く受けた結果、英語の文法に導入された言語個別的な特性であると考えられる。このことは、動詞的動名詞の属格主語と対格主語の発達を比較することから導かれる。たとえば、機能範疇 D による属格付与が普遍文法の一部であるなら、ある条件が揃えば、それが自動的に英語の文法の中で機能すると予測される。一方、機能範疇 D による対格付与が言語個別的規則であり、少しずつ英語の文法に組み込まれていったとすれば、それが完全に確立するまでにはある程度の期間を要したと予測される。Visser (1966 : 1177, 1183) は、19 世紀に入ってから対格主語を伴う動名詞が非常に頻繁に現われるようになったことを報告している。つまり、15 世紀頃に対格主語を伴う動名詞が現われ始めてから、この形式が頻繁に現われるようになる 19 世紀まで、およそ 400 年の期間を要していることになる¹⁵。属格主語に対する対格主語の有標性は、後者が言語個別的性質をもつことを示唆している。

4. 結語

本発表では、(A)英語の動名詞が文の持つ 6 つの統語的特徴(副詞と共起する、前置詞 of を介することなく目的語名詞句をとる、叙述構造 (be + 述語) をなす、否定辞 not を伴う、完了形をなす、受動形をなす) を示すようになった歴史的過程および、(B) (動詞的) 動名詞が属格主語または対格主語を伴うようになった歴史的過程を記述し、これらの言語変化に関わる可能な要因を特定した。具体的には、(A)の史実に対して以下の説明を与えた。

(39) 動名詞と現在分詞および動名詞と不定詞との間に形態的・音韻的交差が

生じた結果、動詞的な特徴をもつ動名詞が出現し始めた。さらに、動名詞の動詞化が進むと、文に近い構造をもつ動名詞も出現し始めた(15世紀から16世紀頃)。この段階において、機能範疇Dは、NP補部だけでなくIP補部も選択できるように再解釈され始めた。

また、(B)の史実に対して以下の説明を与えた。

- (40) a. 動詞的動名詞に属格主語が現われるようになったのは、名詞句一般について見られる形式(つまり、主語を属格で標示すること)を動詞的動名詞に適用した結果である。属格主語に格を与えているのは機能範疇Dである。
- b. 動詞的動名詞に対格主語が現われるようになったのは、現在分詞からの類推による。動詞的動名詞の対格主語に格を与えているのも機能範疇Dであるが、この格付与の仕組みは、言語個別的規則として発達したものである。

注

*本校は、近代英語協会第13回大会(1996年5月24日、於成蹊大学)において口頭発表した原稿の一部に修正を加えたものである。

以下の議論では、名詞化接辞の-ingが動詞に接辞化した構造一般について、動名詞(gerund)という用語を用いる。また、動詞的動名詞(verbal gerund)と言ったときには、とりわけ、機能範疇(functional category)のDがIP補部を選択する構造を意図している。

¹ヘルシンキコーパスの各年代区分に含まれる総語数は、それぞれ以下に示したとおりである。

年代区分	総語数
1150-1250	113010
1250-1350	97480
1350-1420	184230
1420-1500	213850
1500-1570	190160
1570-1640	189800
1640-1710	171040

²Tajima(1985)は、ヘルシンキコーパス中の中英語文献の総語数をはるかに越える豊富なデータに基づいて、本稿と同様の調査を行っている。Tajima(1985: Chapters 1 and 3)は、副詞と共起する動名詞や目的語名詞句を直接しがえる動名詞は、15世紀頃から数量的に著しい増加の傾向にあったことを報告している。したがって、これらの動詞的特徴は、本稿の調査

結果が示すよりも早い時期から発達の傾向にあったと思われる。

³Tajima (1985 : 105 ; 114) は、否定辞 not をともなう動名詞が 14 世紀頃から、受動形動名詞が 15 世紀頃から生起し始めたことを報告している。このことは、これらの動名詞が本稿の調査結果が示すよりも早い時期から生起し始めたことを意味している。しかし、豊富な資料に基づく Tajima (1985) の調査においても、これらの形式は、中英語期の間はごく稀にしか見られない。

⁴(5)に挙げた例は、Visser (1966 : § 1027) より引用したものである。

⁵(6)から(8)に示した例は、Visser (1966 : § 1028) より引用したものである。

⁶(9)から(12)に示した例は、Visser (1966 : § 1031) より引用したものである。

⁷名詞句の構造が単なる NP ではなく、DP-NP という二重構造である根拠に関しては、Abney (1987) を参照。

⁸本校では、議論に関係してこない分裂 Infl 仮説 (split Infl hypothesis ; Pollock (1989), Chomsky (1991), etc.) について言及しない。

⁹-ing は Infl 主要部に含まれる名詞的要素であり、PF において V 主要部に接辞化すると仮定する。

¹⁰動詞的動名詞の発達段階を、DP-VP 構造 → DP-NegP-VP 構造 → DP-IP-NegP-VP 構造といった構造変化として捉えることは大変興味深いものである。しかしながら、この場合、当時の英語話者がそれぞれの段階の構造分析を行なうに至った言語的手がかりを想定しなくてはならない。このことは困難を要するものであるので、(19 a)を採用する。

¹¹おそらくこの頃に(19 b)の構造が確立したと思われる。

¹²動名詞と現在分詞が形態的に交差していたと見做せる例が存在する。

(i) *Kentish Sermons*, 26 — Visser (1966 : 1175)

swo apierede [sc. si sterre] te 3o 3rie kinges of
so appeared the star to those three kinges of
hezenesse toianes 3o sunne risinnde
heathendom against the sun rising

‘so the star appeared to those three heathen kinges at the time of the sun’s rising’

ただし、(i)に関して、動名詞と現在分詞の形態的交差以外の理由も考えられる。

¹³独立分詞の主語の格は、16世紀頃までには主格に移行するが、通格の場合は両者の間に形態上の区別はない。

¹⁴Ohmura (1997) は極小主義プログラム (Minimalist Program ; cf. Chomsky (1995)) に基づいて動詞的動名詞を分析している。とりわけ、属格主語と対格主語の認可は、次の方法で行なわれる。属格素性を含む名詞句は、PF 収束 (PF convergence) のために DP 指定辞まで頭在的に移動する。属格素性を含む機能範疇 D は、LF において、指定辞位置にある名詞句の属格素性を照合する。一方、対格素性を含む名詞句は、頭在的に IP 指定辞まで移動するが、DP 指定辞に移動する必要はない (したがって、移動しない)。LF において、対格素性を含む機能範疇 D は、IP 指定辞にある名詞句の対格素性を誘因 (attract) し照合する。格照合に関する詳しい議論に関しては、Ohmura (1997) を参照。

¹⁵実際、ヘルシンキコーパスを用いて 1640-1710 に現われた属格主語を伴う動詞的動名詞と対格主語を伴う動詞的動名詞の数を比較してみると、前者が 72 例に対して後者は 28 例であった。このことから、少なくともこの時期には、対格主語が頻繁に現われていなかったことがわかる。

引用文献

- Abney, Steven (1987) *The English Noun Phrase in its Sentential Aspect*, Ph. D. dissertation, MIT, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (1991) "Some Notes on Economy of Derivation and Representation," *Principles and Parameters in Comparative Grammar*, edited by Robert Freidin, MIT Press, Cambridge, Massachusetts, 471-454.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- 中尾俊夫 (1972) 『英語史 II (英語学体系 8)』, 大修館, 東京.
- 大村光弘 (Mitsuhiro Ohmura) (1995) 「英語史における属格付与子の変遷について」, 『近代英語研究』第 11 号, 近代英語協会, 47-62.
- Ohmura, Mitsuhiro (1997) "On the EPP Effect in Verbal Gerunds," *Papers from the 14th National Conference of The English Linguistic Society of Japan*, English Linguistic Society of Japan, 151-160.
- Pollock, Jean-Yves (1989) "Verb Movement, Universal Grammar, and the

Structure of IP," *Linguistic Inquiry* 20, 365-424.

Tajima, Matsuji (1985) *The Syntactic Development of the Gerund in Middle English*, Nan'un-do, Tokyo.

Visser, Frederikus Theodorus (1966) *An Historical Syntax of the English Language*, Vol. II, E. J. Brill, Leiden, Netherlands.